

現在解析中である。

2 MRSA が産生する superantigen TSST-1 作用のアニソダミンによる抑制

中川 沙織・櫛谷 幸嗣・山本 達男
新潟大学大学院医歯学総合研究科
国際感染医学講座細菌学分野

TSST-1 は toxic shock syndrome (TSS) や新生児 TSS 様発疹症 (NTED) と関連するが、これは TSST-1 によって T 細胞が活性化され、サイトカインが過剰産生されるためと考えられている。本研究では、サイトカインの過剰産生を抑制する薬剤について検討を行った。用いた薬剤は EM, CAM, AZM, アニソダミンであった。最も抑制効果を示したアニソダミンについては詳細に検討を行った。

ヒト末梢血単核球を TSST-1 で刺激し、アニソダミンを添加したところ、IL-2, IFN- γ , TNF- α の産生が顕著に抑制された。更に、T 細胞特異抗体で T 細胞を刺激し、アニソダミンを作用させたところ、同様にサイトカイン産生が抑制された。以上より、アニソダミンは T 細胞に直接作用してサイトカイン産生を抑制することが分かった。更に、アニソダミンの in vivo 効果について検討を行っている。

3 抗菌剤の適正使用の検討

— 分離菌と使用量の相関性による検討 —

小池 由博・宇野 勝次・鈴木 康稔*
金沢 ち系**・柄沢 安雄**

水原郷病院薬剤科
同 内科*
同 検査科**

各抗菌剤の年間使用量と分離菌から抗菌剤の適正使用の検討を試みた。すなわち、抗菌剤の年間使用量から使用指数、分離菌の感受性から感受性指数を算出し、さらに各抗菌剤の各種細菌に対する有効指数を求めた。各種指数間の相関性の検討により当施設では、1. CNS と緑膿菌の耐性化、2.

第三世代セフェム系薬剤の過剰使用、3. カルバペネム系薬剤とグリコポリペプチド系薬剤の低使用、4. 抗菌剤の使用の偏りが採用薬剤に起因することが明らかとなった。したがって、今後当施設の抗菌剤使用の上記の問題点を改善する必要がある。また、各種細菌の有効指数と各種指数の相関性の検討は、各施設の抗菌剤の適正使用に対する監査システムを構築する上で有用であると考えられる。

4 β -ラクタム系抗菌剤アレルギーにおける IL-8 の関与

宇野 勝次

水原郷病院薬剤科

白血球遊走試験 (LMT) はアレルギー起因薬剤同定試験として有用性 (薬剤過敏症疑診患者約 1,000 例に 70% 以上の陽性率) を認め、LMT で検出される白血球遊走促進因子 (LMAF) は IL-1 や IL-2 産生と相関性を示すことを当施設で明らかにしている。そこで、LMT で検出されるもう一つの因子、すなわち白血球遊走阻止因子 (LMIF) と代表的なケモカインである IL-8 の薬剤アレルギーにおける関連性について検討した。その結果、 β -ラクタム系抗菌剤アレルギーでは LMIF 検出と IL-8 産生は正の相関 (control 値の 4.78 倍, $p < 0.02$, t-test) を認めたが、非ステロイド性抗炎症剤アレルギーでは LMIF 検出と IL-8 産生は負の相関 (control 値の 0.75 倍, $p < 0.005$, t-test) を示した。また、IL-8 は β -ラクタム系抗菌剤アレルギーの産生値では白血球遊走阻止作用を示した。したがって、 β -ラクタム剤アレルギーにおける LMIF 検出群では IL-8 が高く関与していると考えられる。